三重県埋蔵文化財調査報告２０４

門ノ上遺跡発掘調査報告

―三重県四日市市小牧町―

２０００．３

三重県埋蔵文化財センター

序

埋蔵文化財は、祖先が残した貴重な文化遺産であり、現代に生きる私たちの責務としてこれを積極的に保護し後世に伝えていくとともに、更なる文化の向上のための礎とすべきものであります。しかし、一方ではわたしたちの生活を豊かなものとするため、各種の公共事業も必要となってまいります。そのような公共事業に伴って現状保存が困難であると考えられる遺跡については、発掘調査を実施し記録の保存を図ってきているところであります。

ここに報告いたしますのは、平成11年度国補道路改良事業に伴って発掘調査を実施したものであります。この発掘調査成果が、より多くの方面で活用されることを切望するものであります。

なお、調査にあたっては、地元の方々をはじめ、四日市市教育委員会、および関係各位から多大なるご協力と、温かいご配慮を頂くことができました。文末とはなりましたが、各位の誠意ある御対応に、心から御礼申し上げます。

平成12年3月

三重県埋蔵文化財センター
所長　大　井　與　生

例　　言

1．本書は、三重県四日市市小牧町字門ノ上に所在する門ノ上遺跡の発掘調査報告書である。

2．本遺跡の調査は、平成11年度国道365号員弁バイパス国補道路改良事業に伴い、三重県教育委員会が三重県県土整備部道路整備課から経費の執行委任を受けて実施した。

3．調査および整理は次の体制により実施した。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター

調査第一課主事　船越　重伸

資料普及グループ研修員　山口　聡嗣・打田　久美子

面　　積　400㎡

期　　間　平成11年10月４日～同年11月５日

4．調査にあたっては、地元の方々をはじめ、三重県県土整備部道路整備課・北勢県民局建設部道路整備課・四日市市教育委員会からの協力を得た。

5．本書の執筆・編集は調査担当者が行い、執筆分担については、目次に示したほか文末にも記した。なお、室内整理作業、図面作成等は調査担当者と資料普及グループが行った。

6．当地は国土座標第Ⅵ系に属し、本書の方位はこの座標北を用いた。なお、磁針方位は、西偏６度（平成４年、国土地理院）である。

7．本書で報告した記録・遺物等は三重県埋蔵文化財センターで保管している。

8.　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　言……（打田久美子）… 1

Ⅱ　位置と環境……（打田久美子）… 2

Ⅲ　層位と遺構……（山口　聡嗣）… 4

Ⅳ　遺　物……（山口　聡嗣）… 6

Ⅴ　結　語……（山口　聡嗣）… 6

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 3

第２図　遺跡地形図 …… 3

第３図　調査区位置図 …… 4

第４図　調査区全図 …… 5

第５図　調査区土層断面図 …… 5

第６図　ＳＸ１実測図 …… 5

第７図　出土遺物実測図 …… 7

表　目　次

第１表　出土遺物観察表 …… 7

写　真　目　次

調査前風景 …… 9

調査区全景 …… 9

ＳＸ１ …… 10

作業風景 …… 10

出土遺物 …… 10

Ⅰ　前　　言

1．調査契機

今回の発掘調査は、平成１１年度国道３６５号員弁バイパス国補道路改良事業に伴い実施された。門ノ上遺跡は、四日市市小牧町字門ノ上に位置し、この国道の新たなルート付近にはそれ以外にも、門ノ上古墳群、居林古墳群、小牧北遺跡、北山城跡など多くの遺跡が所在している。

調査に先立ち、平成１０年度に試掘調査を実施した。その結果、試掘坑から土師器焼成坑に類似する遺構を検出した。

これを受けて、県土整備部と文化財保護の協議を重ねてきたが、現状保存が困難なため、本調査を行い、記録保存することになった。

調査は、１０月４日から重機掘削を行い、１０月１２日から作業員による手掘り作業となった。

調査区全体の調査は、１０月２６日までかかって終了することができた。最終的な調査面積は、４００㎡である。

調査は、作業員各位のご努力により、無事終了することができた。ここにご芳名を記し、心から感謝の意を表したい。

石垣　利道、市川　節子、市川　敏子、市川　三嗣、市川ゆき子、小笠原泰代、小川　明美、恩田いつ子、北川　幸子、黒田小夜子、國保　義武、小林みち子、近藤とし子、斎藤　清枝、斉藤　末正、斉藤たつ子、斎藤　知子、斉藤ひふみ、斉藤ゆり子、坂口　則子、佐藤　重信、佐藤　禮子、柴田　耕造、柴田　秀雄、島田真純美、嶋出　敏子、鈴木やゑ子、相馬　誠子、谷口　秋海、寺脇　菅子、長田　敏子、波田　晶子、広田　育代、増田　九郎、増田　鈴子、増田千代子、水谷　　文、水谷りつ子、山川ふじ子、山川ふじ子、山口小夜子、山口　峰子、山田　京子、渡辺久美子、渡辺　俊幸、渡辺ふみゑ（敬称略）

2．調査日誌

９月２９日　調査前写真撮影。
１０月４日　重機による表土除去作業開始。
　　５日　表土除去終了。
　　７日　地区設定をおこなう。
　　８日　道具搬入。レベル移動。
　　１２日　現場作業開始。
　　焼土坑の検出。
　　基準点測量。
　　１５日　ＳＸ１，ＳＫ２の遺構掘削。
　　調査区の清掃。
　　掘削作業終了。
　　１８日　写真撮影。
　　２０日　平板測量。
　　２５日　ＳＸ１の遺構平面図作成。
　　２６日　土層断面図作成。
１１月１日　道具等撤収。
　　５日　現地引き渡し。

3．文化財保護法に関する諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は以下により文化庁長官等あてに行っている。

・法第５７条の３第１項（文化庁長官あて）
　平成１１年１０月１日付道整第371号（県知事通知）
・法第９８条の２第１項（文化庁長官あて）
　平成１１年１０月２７日付教生第1070号（県教育長通知）
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（四日市西警察署長あて）
　平成１１年１１月２６日付教生第4-33号（県教育長通知）

（打田久美子）

Ⅱ 位 置 と 環 境

1．地理的環境

四日市市は、三重県北部に位置する。東は伊勢湾に、北は員弁郡及び桑名市・三重郡朝日町に、西は三重郡菰野町及び鈴鹿山脈を境として滋賀県に、南は鈴鹿市及び三重郡楠町にそれぞれ接している。鈴鹿山系に源を発して東流し伊勢湾に注ぐ市内の河川、北から朝明川、海蔵川、三滝川、内部川、鈴鹿川が台地・丘陵を開析しながらそれぞれ沖積低地を形成している。河川が東流するため、台地・丘陵も東西に広がる地形である。

門ノ上遺跡（１）は、小牧町の東部朝明川の左岸の台地上に位置する。標高は約４９ｍで、朝明川の形成している沖積平野との比高差は約１６ｍである。[①] 現状は山林及び畑である。

2．歴史的環境

朝明川流域で旧石器時代の遺跡は今のところ確認されていない。ただし、野呂田遺跡（２）で旧石器時代に属する可能性のある石器片が採集されている。[②]

縄文時代になると左岸では、丸岡遺跡（３）、野呂田遺跡等が挙げられる。丸岡遺跡では土器、石鏃が出土している。野呂田遺跡では土器、石鏃、石鏃未製品、石錘、削器などが採集されており、集落跡の可能性がある。

弥生時代中期には、丸岡遺跡でわずかながら土器片が出土しているが、遺構は明確ではない。後期になると大規模な集落が沖積低地を望む丘陵端部に形成されるようになる。朝明川左岸の朝日丘陵にある西ケ広遺跡（４）では、３４棟もの竪穴住居跡が検出されている。[③] １辺が１０ｍ、平面積が１００㎡に近い大型のものもあり、集落内の共同利用的な建物か、集落の統轄者の建物とも考えられる。[④]

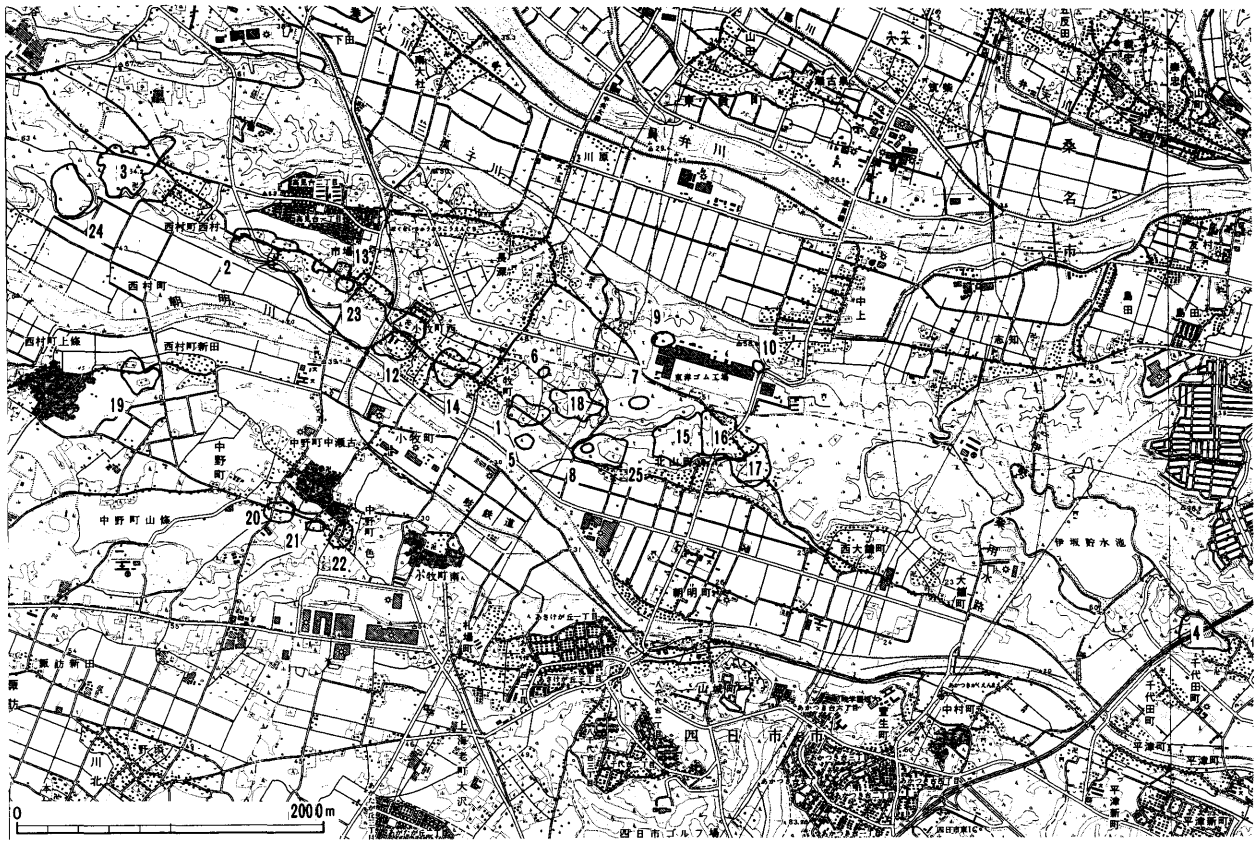
古墳時代に入ると、遺跡数は急激に増加する。しかしながら、７世紀代の群集墳が大部分を占め、４世紀から６世紀の遺跡はかなり希薄な状況である。朝明川左岸では、門ノ上古墳群（５）、若宮古墳群（６）、筆ケ崎古墳群（７）、居林古墳群（８）があり、この地域では有数の古墳群地域であったと考えられる。なお、西ケ広遺跡で６世紀末以降の集落が確認されており、７世紀になると丸岡遺跡や門ノ上遺跡等各所に集落が形成されていったようである。

律令期では四日市市には主に朝明郡と三重郡が置かれた。朝明川流域はその名のとおり朝明郡に属する。八風街道沿いで交通の要衝に位置する西ケ広遺跡では、奈良時代には掘立柱建物が計画的に配置され、規則性を持った大型の庇付建物群が確認されている。[⑤] 陶硯や尾北窯産と思われる須恵器等の遺物も出土しており、郡衙として想定される遺跡である。東員町西山遺跡（９）、新野遺跡（１０）は古墳時代以降平安時代まで断続する集落で、フイゴ羽口や鉄滓が出土しており、製鉄を行う集団の存在が推測される。[⑥] 朝明川左岸では勝部Ｂ遺跡（１１）、丸岡遺跡、野呂田遺跡、大丸遺跡（１２）、的場遺跡（１３）、千栗Ｂ遺跡（１４）、中野山遺跡（１５）、北山Ａ遺跡（１６）、北山Ｂ遺跡（１７）が集落を形成していたと思われる。丸岡遺跡では、飛鳥時代から奈良時代の掘立柱建物２棟を確認している。また、門ノ上遺跡は、弥生時代・古墳時代後期・鎌倉時代と断続する集落で、東側に位置する小牧北遺跡（１８）と一体になる可能性が高い。いずれの遺跡も、遺物は須恵器が主である。右岸では、公事出遺跡（１９）、中野野畑遺跡（２０）、上之山遺跡（２１）、中野平古遺跡（２２）が集落を形成していたと思われる。

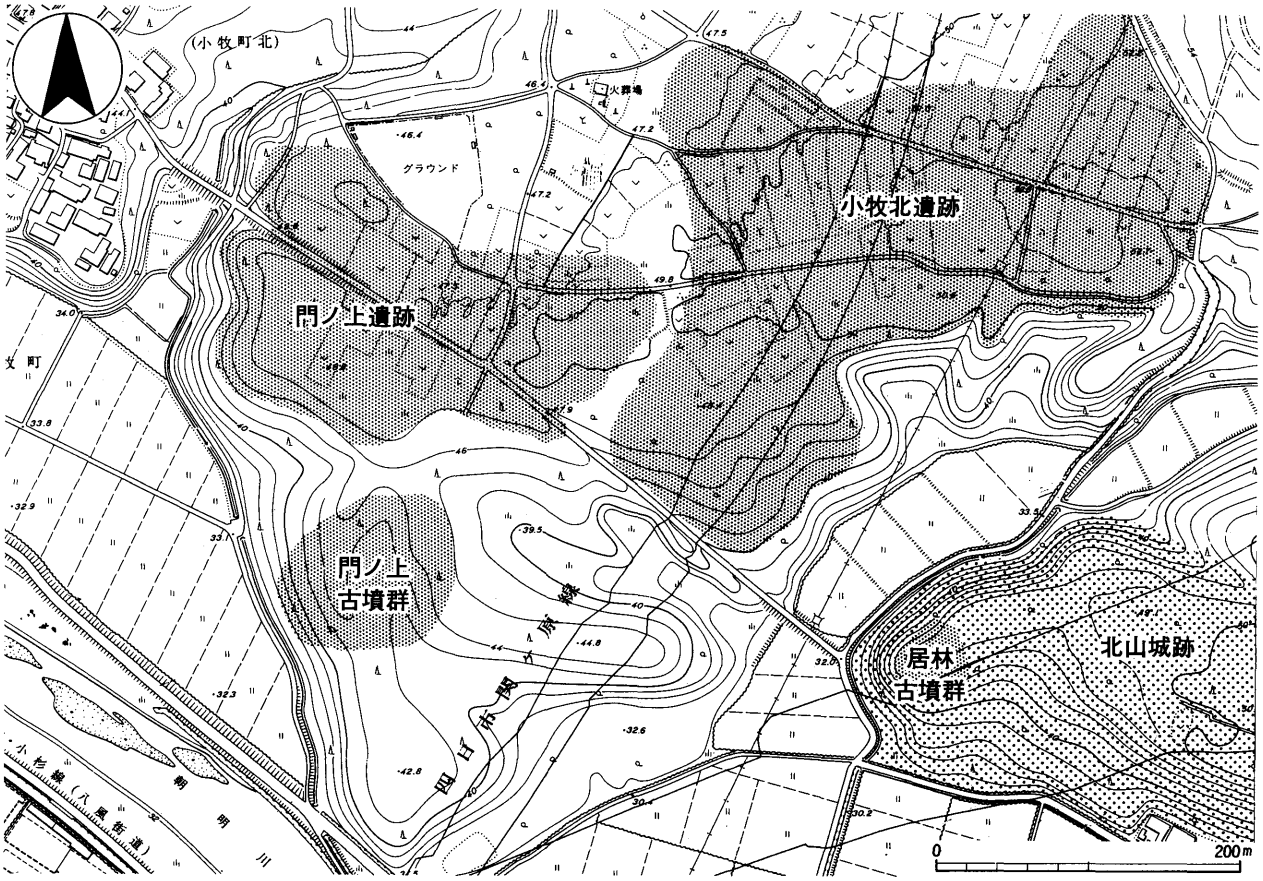
平安時代以降の遺跡では遺物の散布は多くみられるが、遺構が確認された遺跡は市内でもわずかである。朝明川左岸では、野呂田遺跡で遺物が採集されているだけである。

中世城館跡は市内各地でみられるが、朝明川流域には比較的良好な状態で遺存する城館跡が多い。左岸では、市場城跡（２３）や保々西城跡（２４）、門ノ上遺跡の東側に北山城跡（２５）がある。[⑦]

（打田久美子）



第1図　遺跡位置図（1：50,000）　　国土地理院『菰野、桑名』（1：25,000）から



第2図　遺跡地形図（1：5,000）

Ⅲ 層 位 と 遺 構

1．層位

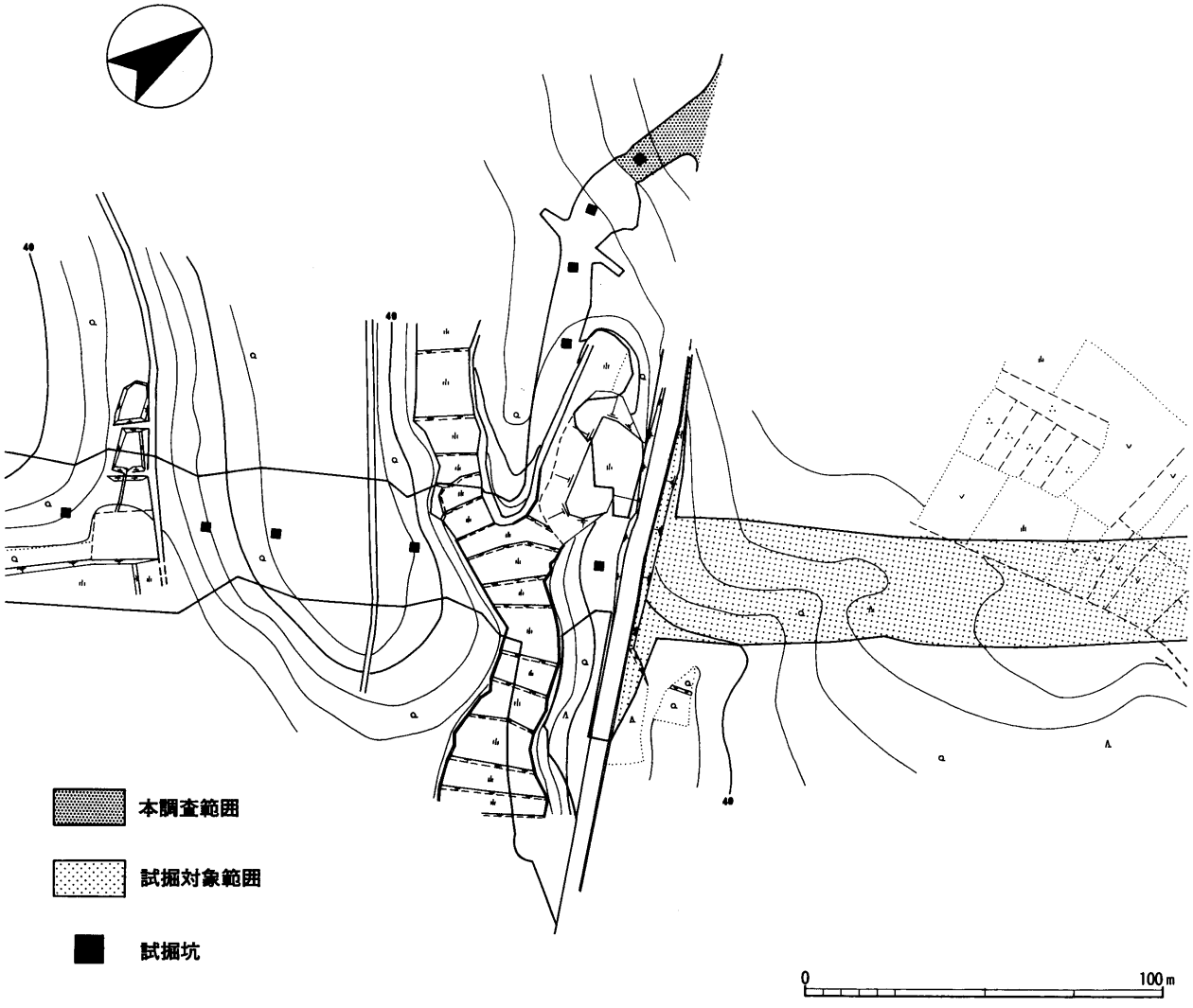
調査区は南斜面にあり、標高48.0m前後である。また、門ノ上遺跡の縁辺部に位置する。

基本的層序は、上から第１層（表土）：腐植土、第２層（地山）：明赤褐色土または明褐色土（礫混入）の順である。地山は、傾斜にしたがい、明赤褐色土から明褐色土（礫混入）に変化している。明確な遺物包含層はなく、明赤褐色土および明褐色土（礫混入）を検出面とした。現地表面から遺構検出面までの深さはごく浅く、３～20cmである。

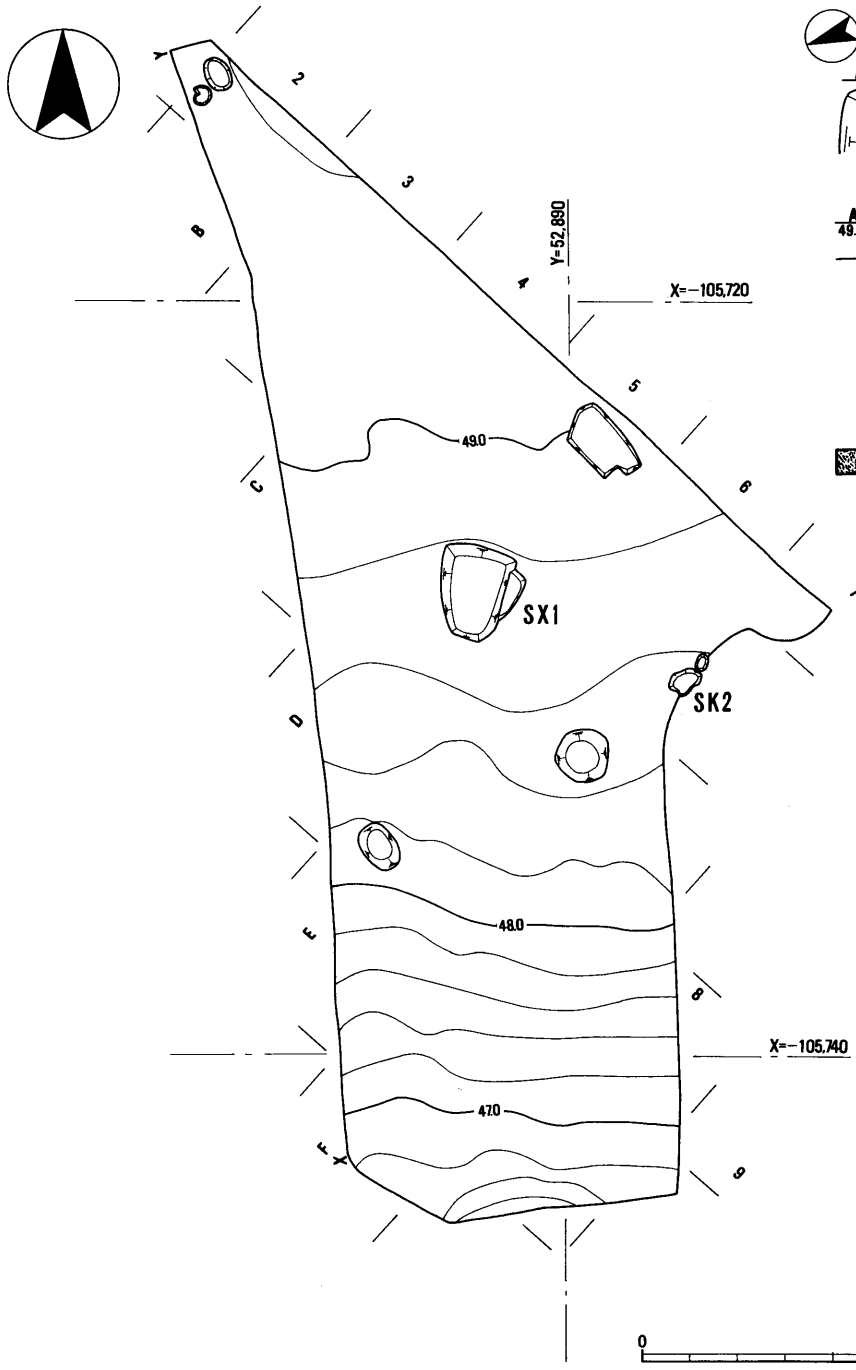
2．遺構

今回の調査では、調査区が400㎡と狭く、また遺跡の縁辺部でもあることから遺構も少なく、焼土坑１基、土坑１基、ピット等を検出したのみである。なお、遺構の深さはすべて検出面からの数値である。

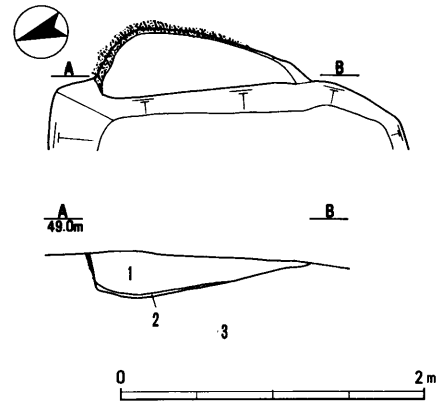
ＳＸ１　調査区中央部で検出した土坑である。深さは25～５cmで床面は北側に傾斜している。遺構の西側は試掘坑により削平されているため、平面形・規模は不明であるが、試掘調査の記録と合わせると全体の平面形は短辺0.5m、長辺1.2mの長方形ある



第３図　調査区位置図（１：2,000）

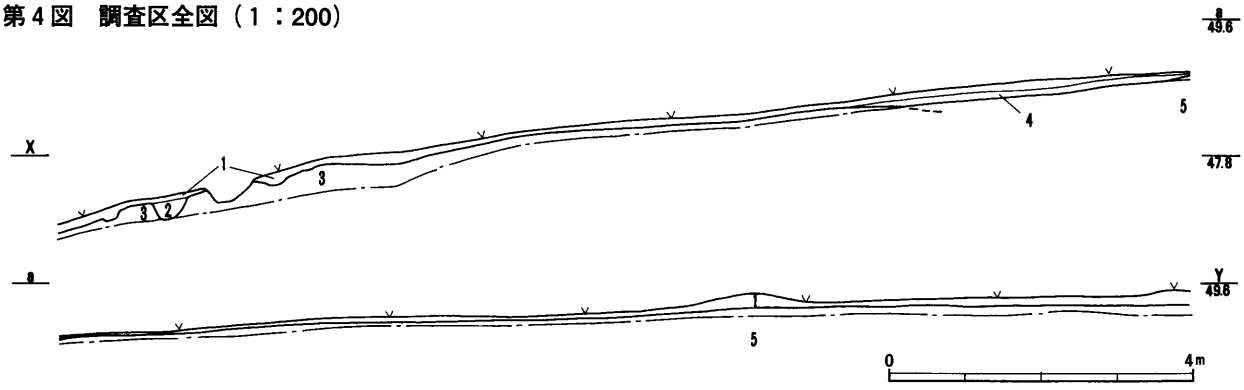


第４図　調査区全図（１：200）



焼土　１．淡褐色土
２．炭層
３．明赤褐色土（地山）

第６図　ＳＸ１実測図（１：50）



１ 腐植土　２ 明灰褐色土（礫混入）　３ 明褐色土（礫混入）　４ 淡褐色土　５ 明赤褐色土

第５図　調査区土層断面図（１：100）

いは台形（隅丸）が想定される。側壁はよく焼けており、北壁で２～５㎝、東壁で３㎝以下の厚さで焼土が認められた。また、焼土は北壁では連続してあるが、東壁では北に厚く南に薄く断続的にあり、南側１/３は焼けていない。底面の直上には厚さ２㎝の炭層が北側２/３のところまで認められた。主にロクロ土師器の小片が出土した。

ＳＫ２　調査区北東部で検出した、長径0.9m、短径0.5m、深さ約0.1mの土坑である。調査区端での検出であるので、全体の形態は不明であるが、およそ直径0.9mの円形の遺構であると推定される。土師器片が出土した。　（山口聡嗣）

Ⅳ　遺　　物

調査区全体から出土した遺物はコンテナバットで３箱である。遺構出土の遺物は全体の１割程度であり、残りは遺構検出中に出土したもので、便宜上、包含層出土の遺物として表記した。

出土遺物は、土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶椀等が見られたが、いずれも小片で、また風化や磨滅の度合いが強い物が多かった。その中で、比較的復元できたのがＳＸ１出土の遺物であり、いくつかの特徴も見られるので、以下に記述する。

１．ＳＸ１出土の遺物

出土したものは主にロクロ土師器片である。復元されたものはすべて椀で、ロクロ成形されており、底部には糸切り痕が認められる。しかし、高台はつけられていない（１～６）。また、底部が、接地面にほぼ平行に剥離しているものが多く（７・８）、これと同じようなものとして、体部の一部がうすく剥離しているものも認められた（２）。（山口聡嗣）

Ⅴ　結　　語

今回の調査区は、400㎡と限られた狭い範囲であり、また門ノ上遺跡の縁辺部に位置することから遺構密度もうすく、得られる情報も限られたものであったが、焼土坑やいくつかの特徴を持つ土器が出土した。それらを手がかりに遺構の性格について考察し、以下に記述する。

１．ＳＸ１について

ＳＸ１からの遺物の大部分はロクロ土師器であり、いくつかは全体の器形が推定できた。すべて内弯気味に立ち上がる体部を持つ椀であるが、（１）は杯と類似した形態をしている。いずれも体部はロクロで成形されていて、底部には糸切り痕があり、高台をつけない点が共通している。これらのロクロ土師器は、地域的・時代的にも限られる独特のもので、８世紀後半から一部先進地で登場し、11～12世紀中葉に多く見られ、13世紀には見られなくなるものである。[8] ロクロ土師器の出土例は少なく、県内での編年は未確立であるが、斎宮の編年[9]を参考にすると、今回出土した遺物の年代は11世紀代に相当し、ＳＸ１は平安時代後期の遺構であるとみられる。

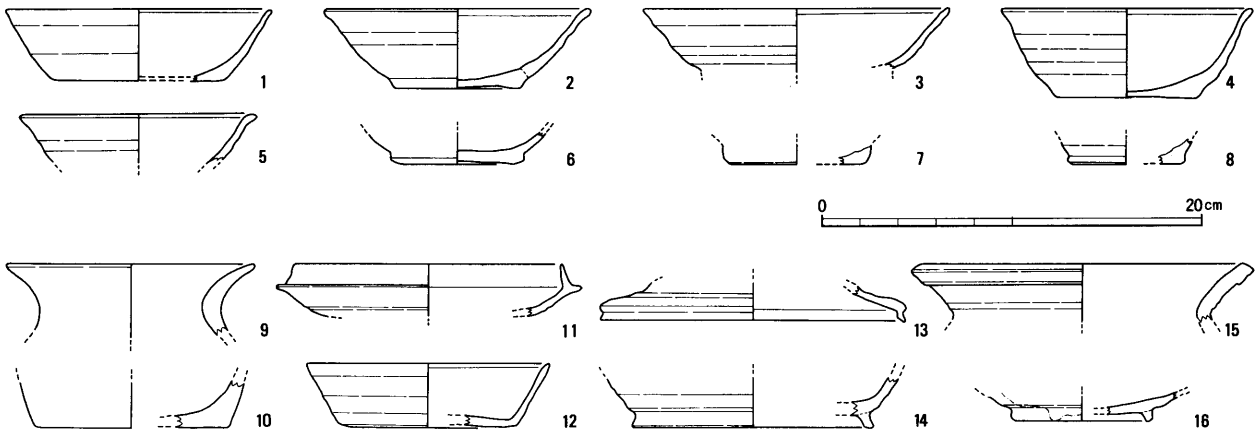
遺構の性格は次の３通りの可能性が考えられる。

(1)土師器焼成坑

(2)火葬墓（中世墓）

(3)製炭土坑

遺構表面の観察の結果、側壁にはよく焼けた赤くかたい焼土が見られたが、底面は炭層が見られただけで、焼土は確認されなかった。木立雅朗氏によると、土師器焼成坑の必要条件として、①掘り込んだだけの単純な遺構であること、②土坑床面が赤色に焼けていること（側面のみが赤色に焼けたものは除外）、③炭・灰・赤色焼土の塊から粒が原位置で確認され、その土坑で直接火を使ったことが明確であること（２次堆積のものは除外）とある。[10]この基準に従うと、ＳＸ１には①と③は適合するが、②はあてはまらない。しかし別の観点から見てみると、ＳＸ１からは前述のロクロ土師器椀が出土したほか、接地面に平行に剥離している底部片（７・８）が多数出土している。これらもロクロ土師器椀の底部であると想定されるが、体部の一部がうすくウロコ状



第７図　出土遺物実測図（１：４）

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量（cm） 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	001 -01	ＳＸ１	B-5～ C-5	ロクロ 土師器椀	13.2	3.8	底部径 8.7	ロクロナデ 底部　糸切り痕	やや密 ２㎜以下の砂粒含	良	にぶい橙 (7.5YR7/4)	口縁部 1/4 底部 1/4	
2	005 -01	ＳＸ１	B-5～ C-5	ロクロ 土師器椀	14.0	4.2	底部径 6.5	ロクロナデ 底部　糸切り痕	やや密 ２㎜以下の砂粒含	良	にぶい黄橙 (10YR7/4)	口縁部 1/3 底部 1/4	口縁部一部に黒斑有り 外側の一部に薄い剥離片有り
3	004 -04	ＳＸ１	B-5～ C-5	ロクロ 土師器椀	16.0	—	—	ロクロナデ	やや疎 2㎜以下の砂粒含	良	橙 (5YR7/6)	口縁部 1/6	
4	002 -01	ＳＸ１	B-5～ C-5	ロクロ 土師器椀	13.2	4.8	底部径 7.4	ロクロナデ 底部　糸切り痕	やや疎	良	外；にぶい黄橙 (10YR7/4) 内；にぶい黄橙 (10YR7/3)	口縁部 1/11 底部 1/4	外面、内面共に黒斑部多し 内面底部まめつ部有り
5	003 -03	ＳＸ１	B-5～ C-5	ロクロ 土師器椀	12.3	—	—	ロクロナデ	やや密 3㎜以下の砂粒含	良	にぶい黄橙 (10YR7/4)	口縁部 1/4	口縁部に黒斑有り
6	001 -02	ＳＸ１	B-5～ C-5	ロクロ 土師器椀	—	—	底部径 7.0	ロクロナデ 底部　糸切り痕	やや密	やや不良	にぶい橙 (7.5YR7/4)	底部 1/3	
7	003 -04	ＳＸ１	B-5～ C-5	ロクロ 土師器椀	—	—	底部径 7.0	不明	2㎜以下の砂粒含	良	にぶい黄橙 (10YR7/4)	底部 1/4	底部のみ残存 接地面に平行に剥離痕
8	003 -02	ＳＸ１	B-5～ C-5	ロクロ 土師器椀	—	—	底部径 6.2	不明	1㎜以下の砂粒含	良	底；褐灰 (7.5YR6/1) 剥離面；にぶい橙 (7.5YR6/4)	底部 1/4	底部のみ残存 接地面に平行に剥離痕
9	006 -03		Ｂ－４ 包含層	土師器 壺	12.8	—	—	不明	やや疎 2㎜以下の砂粒多く含	良	明黄褐 (10YR6/6)	口縁部 1/8	風化度大のため作成技法不明
10	003 -01		Ｂ－３ 包含層	須恵器 坏身	14.0	—	—	ロクロナデ	1㎜以下の砂粒含	やや不良	外；灰黄 (2.5YR6/4) 内；にぶい褐 (7.5YR6/3)	口縁部 1/12	たちあがり部分に、ゆがみ有り
11	006 -02		Ｅ－７ 包含層	須恵器 坏蓋	15.9	—	—	ロクロナデ	やや密 1㎜以下の砂粒含	不良	灰黄 (2.5Y7/2)	口縁部 1/8	焼成不良のため空気によるふくらみ有り
12	005 -03		Ｂ－４ 包含層	須恵器 壺	18.0	—	—	ロクロナデ	やや密 1㎜以下の砂粒多含	不良	灰白 (2.5YR7/1)	口縁部 1/6	
13	007 -01		Ｂ－６ 包含層	土師器	—	—	底部径 10.0	不明	やや密 2㎜以下の砂粒含	良	明黄褐 (10YR7/6)	底部 1/6	まめつ激しく作成技法不明
14	005 -02		Ｂ－３ 包含層	須恵器 坏身	12.6	3.4	底部径 9.2	ロクロナデ 底部；ロクロケズリ	やや密	やや不良	灰黄 (2.5YR7/2)	口縁部ごく一部 底部 1/5	
15	005 -04		Ｄ－６ 包含層	須恵器 壺	—	—	高台径 12.6	ロクロナデ 貼り付け高台後つけ	やや密 1㎜以下の砂粒多含	不良	灰黄 (2.5YR6/2)	底部 1/6	外面に施釉痕 (オリーブ黒 7.5Y6/2)
16	006 -01		Ｅ－７ 包含層	灰釉陶器 椀	—	—	高台径 7.4	ロクロナデ 底部ロクロケズリ 貼り付け高台後つけ	やや密 1㎜以下の砂粒多含	良	灰白 (2.5Y7/1)	高台 1/3	施釉痕(つけがけ) (灰オリーブ 5Y4/3)

第１表　門ノ上遺跡出土遺物観察表

に剥離したロクロ土師器椀もあり、通常の使用や土中への埋まり込みによってはこのような割れ方はしないと考えられる。秋山浩三氏によると、黒斑や円盤状・ウロコ状の剥離片は土師器焼成遺構の認定の有効な証左となりうるという。[11] また、遺跡図や遺構図からもわかるように、調査区が南に傾斜するのに対し、ＳＸ１の床面は北に傾斜している。さらに、ＳＸ１の側壁の赤色焼土と床面の炭層が北側2/3に見られ、床面の浅い南側1/3には見られないことが確認された。これは土師器焼成坑の特徴である。ＳＸ１は焼成坑としては規模が小さいが、三重県の土師器焼成坑は古代では時代が下るにしたがい縮小する傾向があるという。[12] 時代が違うので断言することはできないが、このことは、ＳＸ１が土師器焼成坑であるという可能性を示す一つの材料である。

ＳＸ１の平面形は隅丸方形であり、前述のように側壁は焼けているが床面は焼けていない。このことから、火葬墓（中世墓）の一種と考えることもできる。しかし通常、中世墓への副葬品は完形の場合が多いが、今回の出土状況や復元されたものは完形とは言いがたいものであった。このことから、ＳＸ１が火葬墓（中世墓）であることには疑問を抱くことを禁じえない。また、ＳＸ１からは骨片の出土は確認できなかった。

またこの遺構には、土坑タイプの製炭遺構である製炭土坑の特徴も見られる。製炭土坑は、土師器焼成坑と類似した形態を持ち、「覆い焼き」で焼成され赤色焼土を伴うことが共通している。ただ製作する製品の違いから、低い温度を保ち薪を燃やしつくさないため、側壁が弱く焼け、床面は赤色焼土化しない。また床面には多量の木炭や炭層が認められるものである。[13] また、石川県小松市林遺跡においてＳＸ１と規模が類似した遺構に炭焼窯の可能性を示した報告も見られる。[14] ところが一方、林遺跡では炭焼窯であると断定されるものは規模がＳＸ１の4～9倍あることと、ほとんどの遺構から出土土器が見られなかったことも報告されている。[15] さらにＳＸ１では、製炭土坑の特徴のひとつである炭を焼いたときに遺構内面に付着するタール[16]が見られなかったことと、少なからず土器が出土したことから、製炭土坑の可能性は低いと考えられる。

以上から、断定はできないものの、ＳＸ１は土師器焼成坑の可能性が最も高いと考えられる。

2．おわりに

今回の調査では、ＳＸ１以外に明確な遺構は確認されず、出土遺物も少なかったため、遺跡をどのようなものであると断定することは困難である。四日市市の遺跡地図からもわかるように、今回の調査区は門ノ上遺跡の南東端に所在しており、当時の生活域の縁辺部であるように考えられるが、将来的に周囲の調査がなされることにより、今回の遺構の意味合いがさらに明確になることが期待される。

（山口聡嗣）

〔註〕

①『四日市市遺跡地図』改訂版（四日市市教育委員会、1994年）
②葛山拓也「公事出遺跡」（四日市市教育委員会、1998年）
③片岡博他「西ケ広遺跡第３次Ｅ地区発掘調査現地説明会資料」（三重県埋蔵文化財センター、2000年）
④『三重県の地名』（平凡社、1983年）
⑤『四日市市史』第３巻史料編考古Ⅱ（四日市市、1993年）
⑥東員町教育委員会「西山遺跡、新野遺跡」（東員町教育委員会、1976年）
⑦『北勢の歴史』上巻（郷土出版社、1992年）
⑧重金誠「回転土師器についての一考察」（『中近世土器の基礎研究Ｘ』日本中世土器研究会、1994年）
⑨三重県斎宮跡調査事務所「斎宮跡の土師器」（『三重県斎宮跡調査事務所年報1984』、1985年）
⑩木立雅朗「土師器焼成坑の定義と型式分類」（『古代土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編、1997年）
⑪秋山浩三「黒斑等の遺物属性からみた土器焼成遺構」（『古代土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編、1997年）
⑫竹田憲治他「北野遺跡（第５次）発掘調査概報」（三重県埋蔵文化財センター、1996年）
⑬前掲⑩に同じ
⑭久田正弘他「小松市林遺跡発掘調査報告書」（石川県埋蔵文化財保存協会、1993年）
⑮前掲⑭に同じ
⑯前掲⑩に同じ

調査前風景

調査区全景

ＳＸ１

作業風景

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	もんのうえいせき はっくつちょうさほうこく
書名	門ノ上遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２０４
編著者名	山口聡嗣・打田久美子
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒５１５－０３２５　三重県多気郡明和町竹川５０３番地　TEL.0596-52-1732
発行年月日	西暦　２０００年　３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
門ノ上遺跡（もんのうえいせき）	三重県四日市市（みえけんよっかいちし） 小牧町字門ノ上（こまきちょうあざもんのうえ）	24202	505	35度 02分 40秒	136度 34分 28秒	19991004 ～ 19991105	400	国道365号員弁バイパス国補道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
門ノ上遺跡	その他の生産遺構	平安時代	土師器焼成坑	ロクロ土師器椀	

平成 12(2000) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 10 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告２０４

門ノ上遺跡発掘調査報告

— 三重県四日市市小牧町字門ノ上 —

2000年（平成12年）3月31日

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター
印刷　文化印刷有限会社